●国際動向研究部会

［第二セッション第二部(3)（講義棟201教室） 15:10～16:00］

1. 発表プログラム

コーディネーター：岸本章弘（部会長/ワークスケープ・ラボ）

研究発表１：

「適業適所型オフィスのための『ラウンジワーク』空間の提案」

発表者：岸本章弘（ワークスケープ・ラボ）

研究発表２

「ラウンジワーク空間における行動特性と支援環境の考察」

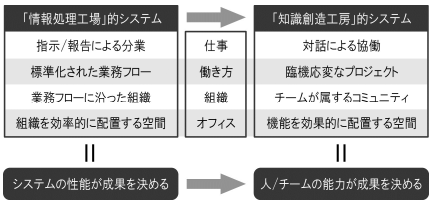
発表者：上野圭一（株式会社エフエム・ソリューション）、菅野文恵（株式会社ゼロイン）、萩坂真紀（株式会社岡村製作所）、佐藤泰（早稲田大学大学院人間科学研究科）

コーディネーター：岸本章弘

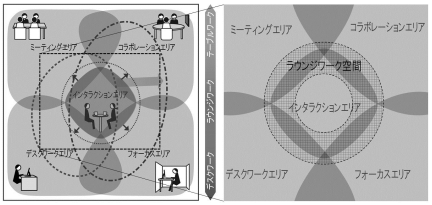
本日はICTの進化とともに変化しつつあるオフィスの役割を前提に、適業適所型ワークスタイルへの変革を促す方策として「ラウンジワーク空間の提案」の総論と各論を発表します。

2. 研究発表１の概要

人の活動の中心は知識創造へ移行していく。そこで求められる活動は、システムを活用しながらチームの成果に貢献することである。オフィスは「組織を配置する空間」から「機能を配置する空間」への転換が求められ、従来型のデスクに代わって集中／協働／交流を支える環境が必要となり、それら空間を使用するワーカーは「適業適所」型のワークスタイルへの変革が求められる。そして一体的な変革には適切なプロセスの選択が不可欠となる。



集中／協働／交流のための空間選択肢を提供するための段階的な移行プロセスを適用する際の現実的条件として、空間は多様化してもそれに伴う全体面積の増加は抑えたい。そのため、カフェテリアやミーティングコーナー、リフレッシュエリアなどを用途転換し、多様な行動を受け入れやすい既存のラウンジ型空間の設計言語を活用しながら「ラウンジワーク空間」として機能の充実を図る。求められる用途機能として、柔軟に選択できる空間／道具／サービスの組み合わせと、形態・形式として共有／開放／用途混在／カジュアルといった利用者が受け入れやすい雰囲気での自由な活動を促すべきである。そして組織全体への普及と浸透を後押しすべく、誰もが適業適所型ワークスタイルを日常的に体験・目撃する機会を増やしていくことが重要である。

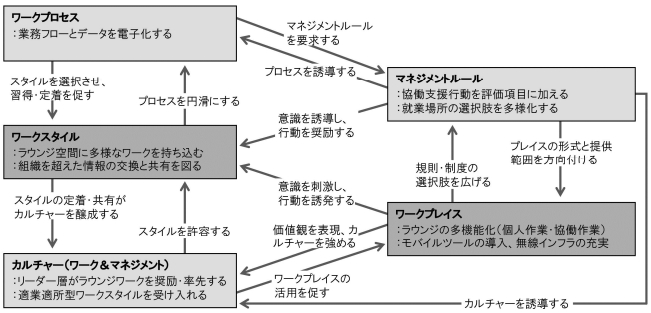


適業適所の空間利用には、「行為の決定」から始まり、「候補空間の状況確認」、空間の「移動」「利用」、そして「利用後の整理」という一連の手続きがあり、共通要件として以下の4点に整理できる。

- ☑ 適正な歩行域内への配置
- ☑ 選択肢の多様性
- ☑ 使用／予約等の状況確認の容易さ
- ☑ 家具／装備／機器の準備と片付けの容易さ

ラウンジワーク空間はオープンで境界が曖昧な共有エリアが想定されることより、セッティングは開放的でアクセスしやすいものとなる。用途／規模／設備において多様な選択肢を求められるが、概ね集中／協働／交流の行動モードによって分類できる。

集中系セッティングはソロワークを支援する。分業型情報処理から熟考型知識創造まで用途嗜好に応じて多様な選択肢が求められる。また、休憩など非仕事行動も許容できることが望ましい。協働系セッティングは特定メンバーが集まって行うグループワークを支援する。グループサイズやツール・環境要件が多様なことと、利用者自身がアレンジできる仕組みが求められる。交流系セッティングは、インフォーマルな出会いと交流を支援。ラウンジやマグネットの機能とサービスを併せ持つ。また、集中／協働／休憩に利用されることも想定することが望ましい。



組織内に適業適所型ワークスタイルを定着させるためには促進／阻害する組織的課題と方策に目を向ける必要がある。自律的行動を奨励する「ルール」と「カルチャー」が求められる。それらをアプローチするために、継続的なチェンジマネジメントが必要となる。

(20分)

3.　研究発表２の概要

1. はじめに

オフィスにおける行動（Activity）がより創造的なものへと大きく変化していく中、オフィスには「組織を配置する空間」から「機能を配置する空間」への転換が求められている。「ラウンジワーク空間」には食堂・カフェなどの本来の用途・機能に加えて、適業適所のための多様な用途への対応と、機能の「再設計」が必要となっている。

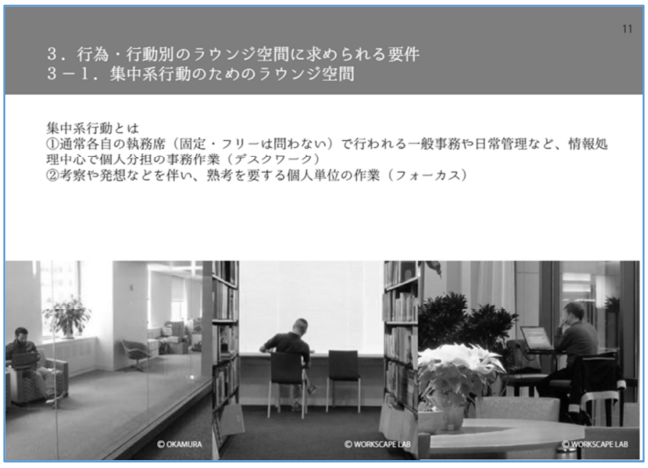
2.「ラウンジワーク空間」に求められる新たな要件

ラウンジワーク空間は、一般的なイメージとしては街中のカフェ（いわゆる 3rd Place）だが、「仕事」のための支援機能が充実していなければならない。逆に、作業スペースとしての機能を追いすぎて、「くつろぎ感」や「ゆったり」した空間環境を損なってもいけない。使い勝手を満足させるバランスが重要である。

3. 行為・行動別のラウンジ空間に求められる要件

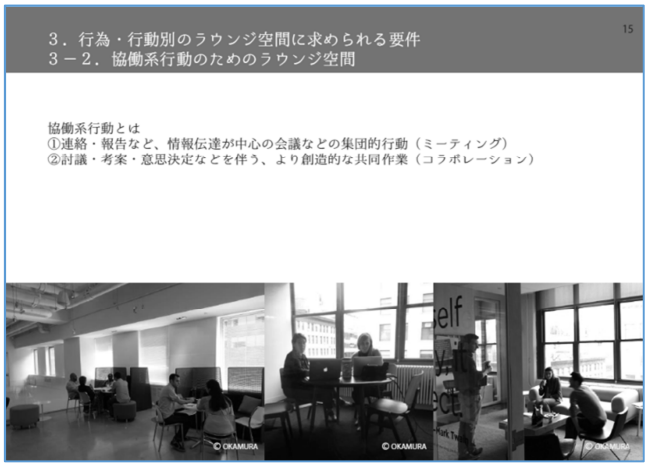
3.1 集中系行動のためのラウンジ空間

集中系行動とは、通常各自の執務席（固定・フリーは問わない）で行われる一般事務や日常管理など、情報処理中心で個人分担の事務作業（デスクワーク）と、考察や発想などを伴い、熟考を要する個人単位の作業（フォーカス）とをいう。



3-2 協働系行動のためのラウンジ空間

協働系行動とは、連絡・報告など、情報伝達が中心の会議などの集団的行動（ミーティング）と、討議・考案・意思決定などを伴う、より創造的な共同作業（コラボレーション）



とをいう。

3-3 交流系行動のためのラウンジ空間

交流系行動とは、偶発的な談話や交流など、インフォーマルコミュニケーション全般をいう。もともとの「ラウンジ空間」に求められる用途・機能に近い。

（20分）。

4. 質疑応答・意見交換

質問１：人間工学研究部会も同じような課題に取り組んでいるので、ぜひ一緒にやりましょう。

→後日、意見交換が行われた。

質問２：ラウンジワーク空間は海外のオフィスでいつごろから始まったのか。

応答２：定かではないが、ご存知の通りシリコンバレーの IT 企業に多く見られる。仕事のシステムがデジタル化したことと、ミレニアル世代の２つの要素が要因であろう。

（溝口寛二）